

## 4年ぶりの北京旅行は快適そのもの、しかも充実していた(前編)

為我井 輝忠

4年ぶりの北京旅行に出かけた。1年中で最も気候が良いと言われる北京の秋を満喫すべく10月23日から11月5日までの13日間滞在した。正に毎日青空をのぞかせた北京の秋はスモッグもない、大気汚染PM2.5もなんのその、快適な滞在を楽しむことが出来た。

今回北京行を決めたのは長年の友人である周路(Zhou Lu)氏が11月2日から6日まで30年に及び芸術活動を記念して展覧会を開催するという案内をいただき、それではぜひとも見たいと思い、“わんりい”の関係者3人(田井、杣野、高橋の3氏)と出かけた。ただ他の方たちは私よりも遅く出発したので、11月1日に宿泊予定の北京ミレニアムホテルで落ち合うことにし、私は一足先に出発した。

10月23日北京空港第3ターミナルに夜8時30分過ぎに(30分ほど遅れた)到着し、機場線(Airport Express)で東直門駅へ向かった。駅を出てタクシーを探したが、なかなか見つからず困っていると、近くに警察官が2人いたので、ホテルまでどのくらいあるか、またタクシーを探してほしいと頼んだ。すると、スマートホンでしばらく探していたみたいで、何とタクシーを呼んで

くれた。しかし、よく見かけるタクシーではなく普通の乗用車のようなようであった。警察官が100元だがいいかと聞くので、相場が分からずOKと言いながら、何だか高そうな気がした。後で気が付いたが、やはり相場よりずいぶん高かった(後で追記したい)。

今回は展覧会出席以外に胡同の調査と写真撮影及び歴史的に古いキリスト教会の訪問を目的としていて、翌日から早速動き回った。「胡同」とは北京や北方で古来モンゴル語の井戸・集落を意味していたが、後に井戸のある地域を指すようになり、同時に、その地域にある住居を四合院と言う伝統的な住居を合わせて総称している。街、横丁、道、路地等と共に「みち」を意味し、北京では特別な意味を持ち、北京の街そのものの代名詞となっている。北京には4,000とも5,000とも胡同があったと言われるが、今では600程度残されているようだ。長い歴史を有する胡同には、今も変わらず多くの人々が住み、庶民的な生活が営まれている。

今回は主として3カ所の胡同(史家胡同、八大胡同、護国寺街)を回ってみた。先の2008年の北京オリンピックを境に広大な胡同が壊され、道



北京で最初に宿泊した「北京新紅資客棧(New Red Capital Residence)」



2番目に宿泊した「北京容園賓館」



史家胡同博物館

路や大きなショッピングセンター、マンション等に作り替えられ、かつての伝統的な古い街並みが消滅していた。そうした場所を再訪して、今はすっかり変貌しているのを見て大変驚かされた。その反面、今も変わらず胡同が残されている地域も想像以上にたくさんあり、こうしたところを見て、まだまだかなり残されているのだと安堵した。今回はこうしたところを歩いてみた。

先ず訪ねたのは東城区にある史家胡同である。実はこの胡同にあるホテルに滞在したので(3泊)、連日このあたりを歩いて胡同の雰囲気を楽しめることが出来た。この胡同の特徴はもともあった四合院を利用した史家胡同博物館があることで、昨年出来たばかりのようだ。ここには2回も来てしまった。昔の四合院の建物をそのまま利用して、当時の生活振りを知るだけでなく、この地域の成り立ちやこの地域に住んでいた著名人の紹介もされていた。史家胡同は名前からして由緒あるようなところで、実際多くの名士が住んでいたようで、今もところどころに立派な屋敷がある。どれも堅く門を閉ざしているので中を覗くことは出来ないが、先の博物館からそれらの姿は

想像することが出来る。

次に訪れた西条区八大胡同は実際にこのような名前の胡同があるのではなく、桜桃斜街、陝西巷、朱家胡同、韓家胡同、百順胡同、胭脂胡同、石頭胡同と言った胡同のある地域を総称したもので、解放前は遊郭があった地域である。前門駅で地下鉄を降り、大きな商店街大柵欄を抜け、観音寺街へ向かって歩いて行くと、にぎやかな商店街が消え、古めかしい商店やら旅館、民家が立ち並ぶ地域に出てきた。街の表示を見ると、陝西巷とある。いよいよこの辺りから昔遊郭があったあたりになるようで、もちろん今はそんななまめかしい雰囲気を示すものは何もない。しかし、ところどころ「おや!」と思わず唸ってしまいそうな建物があるのに気が付いた。

例えば、陝西巷を歩いていると、ごちゃごちゃした路地の一角に2階建ての石造りの建物がある。「雲吉班」と書かれた文字がかすかに読み取れる。まさしくここはかつての妓楼で、中国人ならば誰でも知っている小鳳仙と賽金花が籍を置いていたところである。同じ通りに「上林仙館」という高級妓楼があった建物が残り、今ではホテルに生まれ変わっているが、中を見ればまさしく当時の遊郭の雰囲気を見つけることが出来る。



今も残る昔の遊郭の建物「聚宝茶室」旧址

他にも「臨春楼」や「慶元春」、「聚宝茶室」等と言った妓楼のあった建物が残されている。まるで日本の吉原のような感じである。中には建物保存を示すプレートが掲げられている建物もあり、壊さず保存しているようである。このような猥雑さと古さと庶民性のある胡同を歩いていると時間はあっという間にすぎ、1日では足りないくらいであ





杜霖修ご夫妻と共に

る。もちろん何度も足を運んだことは言うまでもない。

最後に訪ねた胡同は護国寺街である。護国寺という寺がある地域で、2番目に滞在したホテルがある、正に庶民的な街並みの地域である。ここでのあるエピソードと言うべき出来事を紹介したい。狭い胡同を歩きながら写真を撮っていると、ある四合院を改造した家の前で偶然一人の年配の男性に出会った。この方に写真を撮ってもよいかと尋ねると、「どうぞどうぞ」と勧めてくれた。私が拙い中国語で話していたので、外国人と思ひ、英語で話し始めた。私が日本人だと言うと、急に顔を輝かせて、家の中に招き入れてくれた。

名前を杜霖修(仮名)といい、息子が愛知県の愛知大学へ留学していたので、日本には大いに興味があり、しかも写真に関心があるとのことで、日本に行った時の写真を見せてくれた。もっと驚いたのは、中国各地へ写真撮影に出かけたという写真をパソコンで何百枚も見せてくれたことである。全国を写真撮影旅行した際の写真を紹介してくれた。素晴らしいものばかりであった。私も写真に興味があり、北京の古い胡同の写真が好きだと言うと、「それじゃ、昼食を食べてから、とっておきのところを案内しましょう」と提案された。

昼食後、カメラを手に白塔寺、歴代帝王廟、鼓楼、鐘楼、什刹海と周辺の古街等を案内してくれて、私の知らない胡同を見て回る事が出来た。最後に自宅に戻り、夕飯までご馳走してくれた。大連で働いているという息子さんに電話をし、私のことを紹介してくれて、話しをすることも出来た。日本に戻った後、写真を送ることや今後彼と写真を交換し、中国での再会を約束した。この日は正に忘れることが出来ない一日となった。

(続く)